HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ウイルタ語北方言の音韻的・形態的特長 ： 南方言との相違点を中心に
Author(s)	山田, 祥子
Citation	北方人文研究, 10, 51-70
Issue Date	2017-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65810
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_04_yamada_y.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ウイルタ語北方言の音韻的・形態的特徴
―南方言との相違点を中心に―

山田 祥子
（北海道立北方民族博物館）

ウイルタ語は、サハリン島の先住民族であるウイルタ Uilta（旧称オロッコ Orok）の固有の言語である。ツングース諸語の一つで、そのなかでもナーナイ語・ウルチャ語とともに第 III 群に分類される（Ikegami 1974［池上 2001a: 395］）。ウイルタ語の方言は、サハリン北部のワール Val を中心とする地方で話される北方言と、中部のポロナイスク Poronajsk（旧、敷香）を中心とする地方で話される南方言の二つに分けられる（池上 1994a［2001a: 247-248］）[1]。

本稿は、ウイルタ語北方言の音韻論・形態論を整理し、南方言と相違する特徴を明らかにすることを目指す。以下、まず本稿の背景としてウイルタ語の研究と資料について紹介し、その後に北方言の音韻的・形態的特徴を順にみてゆく。

1　はじめに：ウイルタ語の研究と資料

日本におけるウイルタ語研究の伝統は、1905 ～ 1945 年に日本が支配したサハリン南部（樺太）に居住していたウイルタから得られた南方言に依るところが大きい。1945 年以降は、戦後サハリン南部から北海道に移り住んだウイルタ（すなわち南方言話者）の協力を得て、北海道で調査・研究が行われた。澗潟（1981）や池上（1997a）の辞書、Ikegami（1956, 1959, 1973, 2001b ほか）、津曲（1988）／ Tsumagari（1985, 2009）などの文法記述は全て、主として南方言を対象とした調査・研究の成果である。

他方、北方言の話されるサハリン北部は戦前から戦後にかけて日本の研究者が調査する機会がなかったため、日本では北方言の研究が遅れていた。日本の研究者による初めてのウイルタ語北方言調査は、1990 年から 2001 年にかけて池上二良がサハリンに赴いて行った。池上は調査を開始して間もない 1993 年に自ら採録した北方言テキストを報告（池上 1993: 74-91, 94-101）し、南方言と北方言の相違点についての論考（池上 1994a）を著した。

同じ頃、サハリン州政府はウイルタ語教育の実施に向け、それまで書き言葉のなかったウイルタ語を表わすための文字の策定を計画していた（池上 1997b［2001a: 290］）。州政府から協力を請われた池上は 1992 年、露文でウイルタ語文字案を作成・送付した。この文字案は後年、Ikegami（1994）で公刊されている。この文字案のなかで池上は、北方言よりも南方言にウイルタ語のより古い特徴が残されていることを指摘し、ウイルタ語本来の特徴を保持するためにウイルタ語の文字は南方言にもとづいて策定すること、同一の文字体系で北方言も表わすことを提案した（Ikegami 1994［池上 2001a: 146］）。これらの提案は受け入れられ、池上が南方言

[1] 現在サハリンに 300 ～ 400 人のウイルタが居住するが、日常会話はすべてロシア語で行われる。2016 年現在、ウイルタ語の話者は二つの方言を合わせても 10 名に満たず、全員 60 歳を超えている。

の記述に用いてきた音素目録を基礎としてロシア字式のウイルタ語書記法が策定された。その後、池上はウイルタ語話者たちと協力してウイルタ語教科書を編集した。この教科書は 2008 年に刊行され（Ikegami et al. 2008）、これによってウイルタ語に初めて公式な書記法ができた。同書では、池上の提案にもとづき、一つの文字体系で二つの方言が区別して表わされている。

2010 年以降、池上二良の後を受け、山田・荒山（2010）[2]、山田（2011a, 2011b, 2011c, 2012, 2013, 2014, 2015a, 2015b, 2016a, 2016b）、風間（2011）、森貝（2016）により、近年の現地調査で蒐集されたウイルタ語北方言のテキストや文例集が報告されてきた。語彙については、山田・笹倉（2010, 2011, 2013）が民族資料のウイルタ語名称を報告した。いずれの報告も、池上（1997a）の音韻表記によって表記されている。

以上のように、日本におけるウイルタ語北方言の研究は 1990 年代以降、南方言の研究の伝統を基礎として進展してきた。これまでのところ、南方言と共通の音素目録によって北方言テキストを表記することに何の問題もない。このことは、南方言と同一の文字で北方言も表記するという池上の提案（上述、Ikegami 1994［池上 2001a: 146］）の妥当性を裏付けているといえよう。しかし、音素配列や超分節音、形態構造などには、南方言とは異なる特徴もみられる。

上述のとおり 2010 年代以降、ウイルタ語北方言のテキストや文例集などの資料が徐々に増えた。しかも、ほとんどがインターネットをとおして PDF 版で公開され、簡易なテキスト検索ができるようになっている。このようにウイルタ語北方言を記述する資料が整備されつつある現段階で、改めてこの方言の音韻論・形態論を整理してみたい。

以下、ウイルタ語北方言の音韻的・形態的特徴を述べてゆくが、大部分は池上（1955, 1971［2004］, 1997a, 2001b）、津曲（1988）、Tsumagari（1985, 2009）らが記述している南方言の特徴と共通する。こうした共通部分は確認事項として簡略な記述にとどめ、南方言との相違点、ないし、筆者が北方言にのみ認める特徴を取り立てて述べることにする。

2 音素

2.1 子音

ウイルタ語北方言の子音音素として、/p, b, t, d, č, ǰ, k, g, m, n, ɲ, ŋ, l, r, s, x, w, j/ の 18 個を認める（表 1）。

/ g / は、母音間では摩擦音 [ɣ ～ ʁ] で現れる。

/ s / は、/a, ə, o, u/ の前では [s]（例：*satu* [sɑtu]「砂糖」）、/ɵ, i, e/ の前では口蓋化して [ʃ ～ sʲ]（例：*sillaa* [ʃillɑː]「花」）で現れる。/a, o, u/ の前では口蓋化しない。/u/ の前で口蓋化しないことは南方言と異なる（cf. 池上 1997a: xv、Tsumagari 2009: 2）。

/n/ は、前舌母音 /i, e/ の前では口蓋化する。

/l, r/ は、無声子音の前で無声化することが多い（例：*uilta* [uɪ̯l̥tɑ]「ウイルタ」）。

2.2 母音

ウイルタ語北方言の母音音素として、南方言と同様に、/a, ə, o, ɵ, u, i, e/ の 7 個を認める（表 2）。ただし、南方言と異なり、/ɵ/ [o, ȯ] は語根の内部にしか現れない。/ɵ/ の現れについては、3.2 で後述する母音調和の観察にもとづく。

/i, u/ について、池上（1997a: xii-xiv）は南方言で異音 [ɪ], [ʊ] の存在を認め、通時的な観

[2] 津曲敏郎が 2007 ～ 2008 年にサハリンで採録したウイルタの歌謡 4 例の音声データから、荒山千恵が採譜し、筆者（山田）がウイルタ語の歌詞をテキスト化したもの。

表 1: ウイルタ語北方言の子音体系
（ローマ字式音韻表記／ロシア字式の書記法による文字［発音］）

閉鎖音	**p** / п [p]	**t** / т [t]		**k** / к [k]
	b / б [b]	**d** / д [d]		**g** / г [g, ɣ~ʁ]
鼻音	**m** / м [m]	**n** / н [n, ɲ]	**ɲ** / ӈ [ɲ]	**ŋ** / ӊ [ŋ]
摩擦音		**s** / с [s, ʃ~sʲ]		**x** / х [x]
破擦音			**č** / ч [ʧ]	
			ǰ / ҙ [ʤ]	
流音		**l** / л [l, l̥] **r** / р[r, r̥]		
半母音	**w** / в [w]		**j** / ј [j]	

表 2: ウイルタ語北方言の母音体系
（ローマ字式音韻表記／ロシア字式の書記法による文字［発音］）

	前舌		後舌
狭	**i** / и [i]		**u**/ у [u]
	e/ е [e]	**ə** [ə] / ә **ɵ**/ɵ [o, ȯ]	**o**/ о [ɔ]
広			**a**/ а [ɑ]

点から区別に注目しているが、簡略にはいずれも /i/ [i], /u/ [u] で表わしている。北方言でも、同様の方針をとる。

3　音素配列と形態音韻論

3.1　音節構造

音節構造は、南方言と同様に、$(C_1)V_1$ $(V_2)(C_2)$（C：子音、V：母音、かっこ内は任意）と規定できる（Tsumagari 2009: 3 参考）。一つの音節は、さらに細かい単位モーラに分けられる。$(C_1)V_1$ を主モーラ、(V_2) と (C_2) を副モーラと呼ぶ（ibid.）。

原則として、語は二つ以上のモーラで構成され、単音節語は V_1V_2 を含む（Tsumagari 2009: 3）。V_1V_2 の組み合わせには、長母音と同様に発音される同一の母音連続 /aa/ [aː]、 /əə/ [əː]、/oo/ [ɔː]、 / ɵɵ/ [oː, ȯː]、 /uu/ [uː]、/ii/ [iː]、 /ee/ [eː] のほかに、下降二重母音 /ai/ [aĭ]、/au/ [aŭ]、/əi/ [əĭ]、/əu/ [əŭ]、/oi/ [ɔĭ]、/ou/ [ɔŭ]、/ɵi/ [ȯĭ]、/ɵu/ [ȯĭ]、/ui/ [uĭ]、/eu/ [e̯ŭ] がある。ロシア字式の書記法では、同一の母音連続を上付きの長音記号で表わす。

なお、*ərəəi*、*orooi* などの間投詞（いずれも「あらまあ」といった感嘆の意）やオノマトペは上記の原則から外れる。また、北方言では *bii*「私（が）」、*čaa*「その」などで、V_2 が脱落して単音節・単母音で発音されることがある。

3.2 母音調和

母音調和には、次の原則を定めることができる。

- 母音調和の原則：

母音音素を、長母音や二重母音を含めて、次のように三分類する。括弧内は語根にしか現れない音素である。

① /a, aa, ai, au/
② /ə, əə, əi, əu/（/ɵ, ɵɵ, ɵi, ɵu/）
③ /o, oo, oi, ou, u, uu, ui, i, ii, e, ee, eu/

一つの語形のなかに①と②の母音音素は共存しない。③の母音音素は、①の母音音素とも②の母音音素とも共存する。

なお、下記（1）（2）の *ŋənəmjikəəda*「行くときに」、*lakəə*「近く」などのように、まれに母音調和の原則に合わない例もある。

(1) ***ŋənəmjikəəda*** ***tuuxəmbi.***
ŋənə-mjikəə=(d)dA(A) *tuu-xA(n)-bi*
go-PRG.C=EMPH come.down-PRF.P-1SG
歩いて行って、転んでしまった。（山田 2013: 143）

(2) ***sittəi*** ***lakəə*** ***olini.***
sittəi *lakəə* *o-li-ni*
2SG.DIR near become-FUT.P-3SG
あなたに近くなるでしょう［意訳：あなたと仲良しになるよ］。（山田 2013: 232）

/ɵ/ について、ウイルタ語北方言の話者のうち E. A. ビビコワと I. Ja. フェジャエワは、*poro*「エゾライチョウ」と *pɵrɵ*「親指」などの例を挙げ、語根における /o/ と /ɵ/ の対立を主張する（この点を風間 2010: 66 も報告している）。しかし両氏とも、派生接辞や語尾では /o/ と /ɵ/ を区別しない（例：*ə-buddoo-ni*（NEG-PURP-3SG）「～しないように」）し、両氏の発話で人称代名詞の（共時的）語幹内部にも /o/ と /ə/ の共起が認められる（例：*mumboopə*（1PL.ACC）「私たちを」）。また、筆者がこれまで知り合った両氏以外の話者は概して /o/ と /ɵ/ の対立を認識しない。筆者はこの現状を、上記の母音調和の原則において /ɵ/ は語根の内部にしか現れないと規定することで、説明できると考える。

Ikegami（1993: 67）は、今日のウイルタ語において母音音素 /ɵ/ から /u/ への変化が起こっていることを指摘していた。今日のウイルタ語北方言で /ɵ/ が弁別的な価値を持つことは少なく、そのわずかな事例である上述の二語 *poro* と *pɵrɵ* についても、母音を一つと考えてどちらも *poro* と表わし、これらを同音異義語とみることも不可能ではない。一部の話者の規範意識を差し引いて考えれば、Ikegami（1993: 67）の指摘した変化が進んで、この言語の、特に今日の北方言では音素目録に /ɵ/ を立てる必要がなくなりつつあると考えられる。

3.3　語頭・語末の子音制約

原則として、/r/ は語頭に立たない。ただし、ロシア語等からの音訳語はこの限りではない。例文 (3) では、ロシア語の rjukzak（英語の rucksack と同義）がウイルタ語に音訳されて *ruksaaki* となっている。

(3)　***josiko　unǰini:　tari　ruksaakidu　pəətə　puuni　ŋokkisini.***
josiko　un-ri-ni　tari　ruksaaki-du(u)　pəətə　puu(n)-ni　ŋokki-si-ni
Yoshiko　say-IM.P-3SG　that　rucksack-ABL　seal　smell-3SG　smell-IM.P-3SG
ヨシコが「そのリュックサックからアザラシの臭いがしますよ」と言う。
（山田 2014: 109）

語末に立つ子音は、*ǰiŋ*「とても」、*səəm*「真っ赤に」などの一部の副詞を除き、原則として /l/ に限られる。ただし、語の末尾が発音上脱落することがしばしばあり、その結果として子音で終わるように聞こえることは多い。例として (4) では、*učči*n は *uččini*、*mamaŋutak* は *mamaŋutakki* とあるべきところだが、それぞれ末尾の音が発音上脱落している。

(4)　***gə　učči*n　mamaŋutak.**
gə　un-či(n)-ni　mama-ŋu-tAkki
INTJ　say-PRF.P-3SG　old.woman-AL-REF.DIR
さて、かれは言った、自分の（若い方の）つれあいへ。（池上 2002: 118）

3.4　母音間の子音連続

母音音素間における唇音 /p, b, m/ と軟口蓋音 /k, g, ŋ/ の子音音素の連続について、南方言では一般に軟口蓋音・唇音の順 /kp, gb, ŋm/ になるのに対し、北方言の対応する単語ではその逆の順序、すなわち唇音・軟口蓋音の順 /pk, bg, mŋ/ が広く見られる。ただし、北方言では下記 (5)（7）（12）のように話者によって唇音・軟口蓋音の順に揺れが見られることもある。以下の語例では、‖ の左側に南方言の語形、右側に北方言の語形を示す。各例の後に単語の音形や意味、用例などを確認できる参考文献の一部を挙げる。ただし、澗潟（1981）、池上（1997a）、Ozolinja（2001）、Ozolinja and Fedjaeva（2003）の辞書に載る語例の出典は省略する。

- 南方言の /VkpV/ が北方言の /VpkV/ に対応する例：

(5)　*ǰakpu* ‖ *ǰakpu* ～ *ǰapku*「八」（池上 1994a［2001a: 249, 265］）

(6)　*dakpa* ‖ *dapka*「境」（山田 2013: 203, 森貝 2016: 159）

(7)　*tokpo* ‖ *topko* ～ *tokpo*「糸」（池上 1994a［2001a: 262］, 山田・笹倉 2011: 104-105）

(8)　*pəkpu-* ‖ *pəpku-*「くだく」（山田 2011c: 225, 2013: 189）

- 南方言の /VgbV/ が北方言の /VbgV/ に対応する例：

(9)　*pəgbirə* ‖ *pəbgirə*「スキーのストック」

（池上 1994a［2001a: 250］, 山田・笹倉 2013: 50）

(10) *tugbu-* ‖ *tubgu-* 「落とす」（山田 2011a: 34, 2013: 175）

(11) *sugbu* ‖ *subgu* 「魚皮」（風間 2011: 62, 山田 2011a: 38, 2013: 178）

- 南方言の /VŋmV/ が北方言の /VmŋV/ に対応する例：

(12) *aŋma* ‖ *amŋa* ～ *aŋma*「口」（池上 1994a［2001a: 261］, 山田 2013: 158, 2014: 110）

(13) *niŋmaa* ‖ *nimŋaa*「語り物」（山田 2013: 35）

3.5 母音間の単一の *k* の出現制約

南方言の音韻論では、母音間で単一の無声・軟口蓋閉鎖音 *k* が消失するという規則的な変化が認められる。この現象は、池上（1990）の指摘する語彙借用のプロセスにおいて顕著である。たとえば、下の例（14）は日本語からウイルタ語に借用された語彙とされるが、借用元の日本語では母音間に単一の *k* があるのに対し、ウイルタ語に入ると *k* が失われている。また、例（15）（16）は日本語からアイヌ語を経由してウイルタ語に入ったと考えられているが、ここでも単一の *k* の消失はウイルタ語に入ってから起こった変化であると見られている。

(14) **Jap.** *masakari*（マサカリ）> **Uil.** *masaari*「斧」（池上 1990［2004: 281］）

(15) **Jap.** *osiki*（ヲシキ［折敷］）> **Ain.** *otcike* > **Uil.** *očči*「膳、盆」（ibid.）

(16) **Jap.** *sintoko*（シントコ［ほかゐ］）> **Ain.** *sintoko* > **Uil.** *sittoo*「たる」（ibid.）

次の (17) ～ (20) の名詞は、ウイルタ語の通時的変化として、かつては語幹末の母音間に単一の *k* があったが、主格形ではそれが消失あるいは *g, w, j* に変化したと推定される例である（Ikegami 1956［池上 2001a: 23］）。ただし対格形（対格語尾 *-bA* の融合形；5.3 で後述）では、子音の代償反復により *k* が *kk* となり保たれている。

(17) 母音間の *k* が消失（**k* > ∅ / V_V）: **oksoko* > *oksoo*「トナカイぞり」（NOM）
cf. **oksoko+bA* > *oksokkoo*「トナカイぞりを」（ACC）

(18) 母音間の *k* が *g* に交替（**k* > *g* / V_V）: **oljika* > *oljiga*「炉かぎ」（NOM）
cf. **oljika+bA* > *oljikkaa*「炉かぎを」（ACC）

(19) 母音間の *k* が *w* に交替（**k* > *w* / V_V）: **əmukə* > *əmuwə*「ゆりかご」（NOM）
cf. **əmukə+bA* > *əmukkəə*「炉かぎを」（ACC）

(20) 母音間の *k* が *j* に交替（**k* > *j* / V_V）: **čuuki* > *čuuji* 「足のつけね」（NOM）
cf. **čuuki+bA* > *čuukkee*「足のつけねを」（ACC）

（17 ～ 20：Ikegami 1956［池上 2001a: 16-21］の語形変化表にもとづく）

この規則的な音韻変化は、ウイルタ語において母音間で単一の無声・軟口蓋閉鎖音 *k* の出現になんらかの制約があることを想起させる。このことは、池上（1994a［2001a: 250］）を参考に、山田（2009: 15-16）でも指摘した。

ところが、南方言と北方言でかたちの異なる語を比較すると、北方言でのみ母音間に単一の *k*（発音は［kx］）が出現する例がいくつか見出される。前節と同様、‖ の左側に南方言の語形、右側に北方言の語形を示す。

- 南方言の /VxV/ が北方言の /VkV/ に対応する例：

(21)　*laxa* ‖ *laka*「近い」（池上 1994a［2001a: 250, 271］, 2002: 17, 70, 森貝 2016: 151）

(22)　*paaxa* ‖ *paaka*「肝臓」（風間 2010: 64, 山田 2011c: 220）

(23)　*duxu* ‖ *duku*「家」（池上 1994a［2001a: 250, 263］, 2002: 3, 12-14, 山田 2011b: 53）

(24)　*xoxoo* ‖ *xokoo*「くちばし、人形」（池上 2002: 66, 68, 山田・笹倉 2010: 106）

(25)　*burixə* ‖ *burikə, burikkə*「弓」（池上 1994a［2001a: 250］, 2002: 47）

- 南方言の /VkkV/ が北方言の /VkV/ に対応する例：

(26)　*pakkam* ‖ *pakam*「真っ黒に」（池上 2002: 7, 9, 山田 2014: 110）

(27)　*=lAkkA* ‖ *=lAkA* 主題化の倚辞（池上 1994b［2001a: 98］, 2002: 8, 山田 2014: 111）

- 南方言で対応する語がない、北方言の /VkV/ を含む語の例：

(28)　*ataka*「おばあちゃん（祖母）」（山田 2011b: 54）

(29)　*gəgdəkə*「いつも」（山田 2012: 164）

これらの例から、北方言においては母音間の単一の *k* が許容されやすい、すなわち、北方言では母音間における無声・軟口蓋閉鎖音の出現制約が南方言よりも弱いと考えられる。

また、同じく母音間の単一の *g* についても、類似の傾向が見られる。

- 南方言の /VV/ が北方言の /VgV/ に対応する例：

(30)　*ɵərɵ* ‖ *ɵgərɵ*「カラフトマス」（池上 1994a［2001a: 250］）

(31)　*saari* ‖ *sagari*「黒い」（池上 1994a［2001a: 250］、山田 2011b: 50, 2014: 111）

(32)　*səəri* ‖ *səgəri*「魚の背骨」（山田 2011a: 37, 38）

もっとも、上述（2.1）のように母音間で単一の *g* は軟口蓋摩擦音 [ɣ ～ ʁ] で現れるため、母音間において有声・軟口蓋閉鎖音 [g] が出現しないという点でどちらの方言も共通している。

4　超音節音

4.1　アクセント

南方言と同様に、声の高低（ピッチ）変化によるアクセント（高低アクセント）を認める。どの単語（句）においてもアクセントの位置やパターンは一定で、非弁別的である（津曲 1983、Tsumagari 2009）。さらに語の後ろから 2 番目のモーラ（それが副モーラの場合は、その前の主モーラ）が高く発音され、これをアクセントの峰とする（Tsumagari 2009: 3–4）。2 モーラから成り第一モーラが高くなる語以外は、語の最初から二番目のモーラからアクセントの峰までが高く発音される（ibid.）。この原則は、おおむね北方言にも適用できる。

しかし、今日の北方言では同一母音の連続（長母音）に強さアクセントを置く傾向がある。これに関連して、同一母音の連続する音節に隣接する音節の母音 /o/ が、しばしば [ɑ] に近い音で現れる。これはロシア語の発音規則で、強さアクセントの前か後ろにある /o/ が [ɑ] あるいは [ɑ] に近く発音されることと、著しく類似している。以下の例（33）〜（38）では音節境界を | で表わす。

(33)　*ok*|*soo* [ɑksɔ́ː]「トナカイぞり」（山田・笹倉 2011: 107–108）

(34)　*bo*|*boo*|*nik*|*ka* [bɑbɔ́ːniqqɑ]「頭巾」（山田 2011b: 50, 山田・笹倉 2013: 54–55）

(35)　*joo*|*do*|*pu* [jɔ́ːdɑpu]「ヨードプ（振楽器）」（山田 2011a）

(36)　*o*|*juu*|*kam*|*ba* [ɑjúːkɑmbɑ]「少し」（< *ojuuka(n)-bA*；a.little-ACC）（山田 2014: 105）

(37)　*see*|*to*|*si*|*či* [ʃéːtɑʃitʃi]「音をたてている」（< *seeto-si-či*; rustle-IM.P-3PL）（山田 2013: 205）

(38)　*o*|*poom*|*bu*|*ri* [ɑpɔ́ːmburi]「する」（< *o-poon-buri*; become-CAUS-IPSN.IM.P）（山田 2011c: 224）

このような例はウイルタ語テキストの採録においてしばしば確認されるが、別のときに話者に尋ねて発音を確かめると、通常どおり母音 /o/ は [ɔ] で発音される。話者には /o/ は [ɔ] という規範意識があるものの、語りのなかでは無意識的にロシア語の発音の「癖」が出るものと思われる。

4.2　イントネーション

イントネーションは、平叙文の場合、下降調が基本である。南方言の口頭文芸で特徴的な伝聞形式にともなう上昇イントネーション（山田 2008: 64）は、北方言では確認されない。

命令文の場合、最も基本的な命令形 *-ru* をともなう命令文では、多くの場合イントネーションは下降調である。特に（39）のような *ɔjjee* をともなう否定の命令文では、下降調のイントネーションが顕著である。しかし、（40）のように *unuu*「言え」という語をともなう命令文は例外で、この語にかけてイントネーションが上昇することが多い。

(39) ***əjjee*** ***aksaa!***
əjjee *aksa+rA* ↘
NEG.IMP get.angry+NIM
腹を立てるな！

(40) ***uiltadaiji*** ***unuu!***
uilta-dAi-ji *un+ru* ↗
Uilta-LNG-INS say+IMP
ウイルタ語で言え！

疑問文の場合、肯否疑問文（Yes-No 疑問文）ではイントネーションが上昇する。とりわけ、（41）（42）のように疑問の倚辞 *=i* をともなう場合は、この倚辞の部分を極端に高く発音して疑問の意を強める。なお、（42）は勧誘の構文に疑問の意味が加わっている。[3]

(41) ***jimda*** ***naaduni*** ***biččisui?***
jimda *naa-du-ni* *bičči(n)-su=i* ↗
Zhimda land-DAT-3SG COP.PRF.P-2PL=YNQ
ジムダ［地名］に住んだことはある？（山田 2013: 200）

(42) ***čaiwa*** ***ummisui?***
čai-bA *umi+ri-su=i* ↗
tea-ACC drink+IM.P-2PL=YNQ
（一緒に）お茶を飲みましょうか？（2011 年 8 月 19 日、E. A. ビビコワより筆者採録）

他方、疑問詞疑問文のイントネーションは上昇する場合と下降する場合に分かれる。この区別に規則性があるかどうかは、今後の検討を要する。次の（43）はイントネーションが上昇する例、（44）は下降する例である。

(43) ***xooni*** ***biisee?***
xooni *bii-si+kA* ↗
how COP.IM.P-2SG+WHQ
いかがお過ごしですか？（2011 年 8 月 19 日、E.A. ビビコワより筆者採録）

(44) ***xaiji*** ***bolgoxosee,*** ***ŋəələluxəsee?***
xai-ji *bolgo-xA(n)-si+kA* *ŋəələ-lu-xA(n)-si+kA* ↘
what-INS be.frightened-PRF.P-2SG+WHQ fear-INCH-PRF.P-2SG+WHQ
なんでおびえているんだい？（山田 2011b: 52）

[3] 不完了形動詞-*ri* と二人称複数-*su* の組み合わせで勧誘の意味が表わされることは、南方言の文法記述で Ikegami（1959［2001: 39］）、Tsumagari（2009: 8）が指摘している。

5 形態構造

他のツングース諸語と同様にウイルタ語は原則として接尾辞・膠着的で、「中心的要素に附属的な要素がいくつも連結する」（池上 1971［2004: 81］）形態構造をとる 。この原則は南方言でも北方言でも同様だが、細部においては異なる記述を要する部分もある。以下では、主に動詞を例にして、ウイルタ語北方言の形態構造をみてみたい。

5.1 語と付属形式の分類

語やそれに付属する形式は、そのふるまいや機能によって表 3 のように分類される。

表 3: 語と付属形式の分類

語	変化詞類	名詞類	名詞、代名詞、数詞、形容詞
		動詞類	動詞
	不変化詞類		副詞、（接続詞、）間投詞、付属語
付属形式	倚辞		
	派生接辞		
	語尾		格語尾、活用語尾、人称語尾、複数語尾

※ 括弧内は借用による形式

語は、付属形式を接続して変化する「変化詞類」と、付属形式を接続しない「不変化詞類」とに分けられる。

変化詞類のうち、名詞類は名詞、代名詞、数詞、形容詞を含み、格語尾をとって名詞変化を行う。名詞変化については、Ikegami（1956）による南方言のパラダイムが参考になる。

動詞類は、活用語尾をとって動詞活用を行う。

不変化詞類には、ウイルタ語固有の副詞、間投詞、付属語のほか、ロシア語からの音訳借用による接続詞（例：*a* < **Rus.** *a*「そして」、*i* < **Rus.** *i*「そして」「〜と」、*esli* < **Rus.** *esli*「もし」など）を含む。

付属語および付属形式（倚辞、派生接辞、語尾）についての詳述は、次節に譲る。

5.2 形態素の連結

本節では、動詞の構造を例に、形態素の連結について述べる。風間（1992）・金子（1998）を参考に、動詞語幹を中心的要素として、それに付属的な要素がいくつも連結して形作られる構造の全体を「動詞複合体」と呼ぶ。ウイルタ語の動詞複合体の構成（肯定文の述語の場合）は、おおむね図 1 のように一般化できる。

以下、図 1 で示した構成要素それぞれの特徴を説明する。[ ] の通し番号は図 1 に対応する。

[0] 語根

そのままで動詞語幹になる場合（45）（46）と、そうでない場合（47）がある。後者の場合、

[4] 否定の動詞複合体は、「否定動詞語幹（－派生接辞）－活用語尾（－人称語尾／複数語尾）# 否定される動詞語幹－形動詞語尾-*rA*（＝倚辞）（# 付属語）」という構成を規定できる。

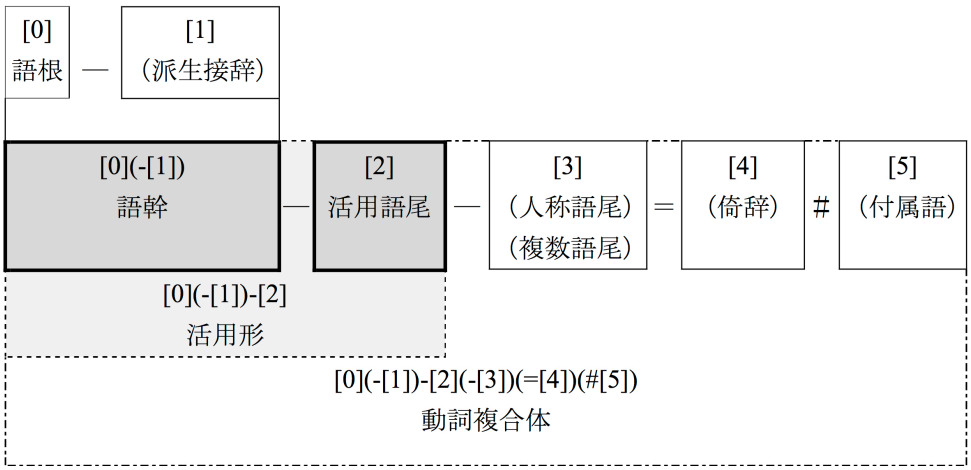

図 1：ウイルタ語における動詞複合体の構成（肯定文の述語の場合）[4]
※ 括弧内は任意の要素

語根は名詞語幹であり、それに派生接辞を付加して動詞を派生できる。

(45)　*itə-*「見る」＞ *itə-xə* (see-PRF.P)「見た」／ *itə-ndə-xə* (see-DIT-PRF.P)「見に行った」

(46)　*gida-*「槍をさす」「槍」＞ *gida-xa* (spear-PRF.P)「槍をさした」

(47)　*dausu*「塩」＞ **dausu-xa* (salt-PRF.P) ／ *dausu-la-xa* (salt-VSF-PRF.P)「塩漬けにした」

[1]　派生接辞

Ikegami（1973）のいう verb-stem-formative suffixes「動詞語幹形成接辞」を指す。例えば上掲の（45）における *-ndA*（DIT）、（47）における *-lA*（VSF）がこれに当たる。[0] で述べたように、語根がそのままで動詞語幹になる場合（上掲の例 45、46）は、派生接辞は必須ではない。

おもにヴォイス（動詞の自他、使役、受身、相互、自発など）や動作様相（継続、開始など）の意味を加える。

[2]　活用語尾

Ikegami（1959）・池上（2001b）が simple verb-endings「基本活用語尾」と呼ぶものと secondary verb-endings「動詞二次語尾」と呼ぶものが結合したものの全体を、本稿では「活用語尾」と呼ぶ。この活用語尾がないと語幹だけでは文の構成素とならない、動詞複合体の必須要素である。かつ、二つ以上連なることはないと考えられる。おもにテンス・アスペクトの意味を表わす。

[3] 人称語尾／複数語尾

Ikegami（1959）・池上（2001b）でも同様に personal endings「人称語尾」、plural ending「複数語尾」と呼ばれる。前に立つ活用語尾の種類によって、後続する人称語尾／複数語尾の系列

が異なる。人称語尾と人称語尾、複数語尾と複数語尾など、同じ種類の語尾が二つ以上連なることはない。

人称語尾は、主語の人称を標示する機能をもつ。人称語尾をとるかとらないかは直前の活用語尾の種類（ないし活用形の種類）によって決まる。複数語尾は、人称語尾がつかない場合、あるいはゼロの場合に、その後ろに連なって主語の複数性を標示することがある。ただし、複数語尾による数の標示は必ずしも義務的ではない。

[4]　倚辞

Ikegami（1959）・池上（1994b, 2001b）が other endings「その他の語尾」と呼ぶもの。動詞だけでなく名詞や形容詞にもつき、先行する要素から文法的な制約を受けないという点で、他の「語尾」よりも自立性の高い形態素である。しかし、音韻的には前の要素との結びつきが強く、母音調和だけでなく融合を起こすという点で「語」と呼ぶにも問題がある。本稿ではこのような形態素を「倚辞」と呼ぶ。おもに伝聞、感嘆、疑問など、広義のモダリティと関連する意味を表わす。

[5]　付属語

倚辞と現れ方も意味も似ているが、先行する要素との音韻的な結びつきが弱く、融合も母音調和も起こさない。そのため形態的な基準から独立の語とみなす。しかし述語の直後に固定されている点で、統語的に述語に拘束されている。こうした統語的機能は、日本語の終助詞と類似する。おもに、推量・強調などの意味を加える。

(48) は、*doromočini* という述語の後ろに推量を表わす付属語 *taani* が連なっている例である。

(48) ***amba doromočini taani.***
amba doromo-či(n)-ni taani
beast steal-PRF.P-3SG INFER
化け物が盗んだのだろう（2011 年 2 月 11 日、E. A. ビビコワより筆者採録）

5.3　融合と接着

前節で動詞を例に見たように語幹や語尾などさまざまな形態素が一定の原則にしたがって連結するのが基本であるが、語の内部に限っては隣り合う形態素が複雑な音韻変化を起こして、表層で簡単に分離できないこともある。このような現象を「融合」と呼んでいる（南方言について津曲（1988: 745）、池上（2001b: 157）ほか参考）。本稿では、「融合」と区別して、表層で形態素境界がはっきりしている場合を「接着」と呼ぶ（この用語は、池上（1994a）にならう）。

語形成のプロセスにおいて、形態素どうしが接着するか融合するかは、多くの場合、前の形態素の末尾の音韻構造【条件 1】と後ろの形態素の種類【条件 2】によって決まる。

【条件 1】　前の形態素の末尾の音韻構造が /-CV/ である。
【条件 2】　後ろの形態素が①②のいずれかに該当する。
① 単一の *r* で始まるもの例：*-rA* (NIM.P), *-ri* (IM.P), *-rAkkA* (PRS.EVD.F.3), *-rilA-* (NFUT.F), *-rAŋA-* (DFUT.F), …
② 単一の *b* で始まるもの　例：*-bA* (ACC), *-buri* (IPSN.IM.P), *-bukki* (HBT), …

【条件 1】【条件 2】を同時に満たす場合、子音の代償反復や母音の長音化などによって、融

合が起こる。【条件 2】において上記①の場合を「タイプ①」として表 4-1 に、②の場合を「タイプ②」として表 4-2 に例示する。最右列の音韻変化について「融合」とした以外の部分は、「接着」に該当する。

なお、動詞活用において Ikegami（1959）・池上（1994a, 2001b）が「0.2 類」とするタイプの動詞は、独自の活用を行う。「0.2 類」は語彙的に決まっており、音韻構造からは規定できない。ここでは、活用語尾の基底形を示す際、「*-rA/-si*」「*-buri/ -puri*」のように、/（スラッシュ）の右側に「0.2 類」のとる形式を表わす。

そのほかに語幹末が *-ptu* の動詞（例：*aaptu-* + *-ri* ＞ *aapči*「着く」など）や特殊な変化をする動詞（例：*bi-* + *-ri* ＞ *bii*「いる、ある」、*bul-* + *-ri* ＞ *buji*「死ぬ」など）もある。こうした不規則変化動詞や上記の「0.2 類」の存在を考慮すれば、融合の法則を単純に規定するのは難しい。網羅的に説明する場合は、Ikegami（1959）のように精細なパラダイムの記述が必要となる。

この他に融合の「タイプ③」として、末尾が-CV の語に単一の *k* で始まる倚辞[5]が連なるときに起こる母音の長音化がある。次の（49）（50）は、感嘆の倚辞*=kAA* が融合する「タイプ③」の例である。

(49) ***mapa*** ***unjini*** ***bəjətoi,*** ***bəjəə,*** ***bii*** ***simbee*** ***pəətətəi,***
mapa *un-ri-ni* *bəjə-tAi* *bəjə+kAA* *bii* *simbee* *pəətə-tAi*
old.man say-IM.P-3SG bear-DIR bear+EXC 1SG.NOM 2SG.ACC seal-DIR
namu ***ǰaŋgeetaini*** ***buuriwi.***
namu *ǰaŋgee-tAi-ni* *buu-ri-wi*
sea official-DIR-3SG give-IM.P-1SG
おじいさんはクマに言います、「クマや、わしはおまえを海の主アザラシにささげよう。」（山田 2013: 222）

(50) ***baisai*** ***dauripoo.***
baisai *dau-ri-pu+kAA*
to.the.other.side go.across-IM.P-1PL+EXC
向こう岸へ渡るんだ（山田・荒山 2010: 66）

[5] 例：*=kA*（WHQ）、*=kAA*（EXC）など。

表 4-1: タイプ①：否定につく形動詞語尾 *-rA/-si* の結合

直前の要素の末尾の音韻構造		例		音韻変化	
		基底形（STEM＋*-rA/-si*）	結合形	語幹末	語尾頭
-VV		*waa-*＋*-rA* ＞	*waa-ra*	なし	
-VCV		*ŋənə-*＋*-rA* ＞	***ŋənnəə***	融合	
-CCV		*əksə-*＋*-rA* ＞	***əksəə***		
-C	*-l*	*bujal-*＋*-rA* ＞	*bujal-**d**a*	なし	*r* > *d*
	-g	*xaag-*＋*-rA* ＞	*xaag-**d**a*		
	-n	*un-*＋*-rA* ＞	*un-**d**ə*		
*-V*k*V		*loo-*（<**-loko*）＋*-rA* ＞	***lokkoo*** ～ *loo-ro*	融合～なし	
「0.2類」		*andu*＋*-si* ＞	*andu-si*	なし	

（Ikegami 1959, Tsumagari 2009 を参考に作表）

表 4-2: タイプ②：対格語尾*-bA* の結合

直前の要素の末尾の音韻構造		例		音韻変化	
		基底形（STEM＋*-bA*）	結合形	語幹末	語尾頭
-VV		*naa*＋*-bA* ＞	*naa-**w**a*	なし	*b* > *w*
-VCV		*ulisə*＋*-bA* ＞	***ulissəə***	融合	
			～ *ulisə**m**-bə*	*m*挿入	なし
-CCV		*əəktə*＋*-bA*	***əəktəə***	融合	
			～ *əəktə**m**-bə*	*m*挿入	なし
-C	*-l*	*mamaril*＋*-bA* ＞	*mamaril-ba*	なし	
	-(n)	*siro(n)-*＋*-bA* ＞	*siro**m**-ba*	*n* > *m*	なし
*-V*k*V		*giləə*（<**-giləkə*）＋*-bA* ＞	***giləkkəə***	融合	
			～ *giləə**m**-bə*	*m*挿入	なし

（Ikegami 1959 を参考に作表）

注意したいのは、今日の北方言を見ると、同じ環境でも融合と接着のどちらも起こりうる場合があるということだ。たとえば、表 4-1 に示したように*-V*k*V タイプの動詞語幹 *loo-*「掛ける」と *-rA/-si* の結合では、通時的な推定形に含まれる語幹第二末尾の *k* が表層に現れた

lokkoo というかたち（融合形）と、共時的な語幹-VV から類推した *looro* というかたち（接着形）の二種類を認める。特定の形式で融合形と接着形の両方があるのは、表 4-2 に示した対格語尾 *-bA* (ACC) の結合でも同様である。表 4-2 では、*giləkkəə* と *giləəmbə* の例を挙げた。これは、*-V*k*V* タイプの名詞語幹 *giləə*「ニヴフ」に対格語尾 *-bA* が結合した場合に、融合形 *giləkkəə* と接着形 *giləəmbə*の二種類が認められる例である。

以下、対格語尾 *-bA* の例として（51a）（51b）（52a）（52b）を補足する。後の方の（52a）と（52b）は、同一の話し手から採録された例文である。なお、風間（2010）から引用する（52a）（52b）のグロスは本稿筆者による。

(51) a. ***səduximbə***
səduxi(n)-bA
berry-ACC
ベリーを（接着形）

b. ***səduxxee***
səduxi+bA
berry+ACC
ベリーを（融合形）

(52) a. …***pəətəmbə*** ***bəiččiči,*** ***bi*** ***čawa*** ***itəčixəmbi,***
pəətə(n)-bA *bəiči+ri-či* *bii* *čawa* *itə-či-xA(n)-bi*
seal-ACC hunt+IM.P-3PL 1SG.NOM that.ACC see-ITR-PRF.P-1SG
nučiikəjji.
nučiikə-jji
small-REF.DAT
アザラシを獲る、私はそれを見ていた、小さい時に。（風間 2010: 69–70）

b. ***maparisal*** ***bəiččiči,*** ***anu,*** ***pəəttəə,*** ***anuji,*** ***gidaji.***
maparisal *bəiči+ri-či* *anu* *pəətə+bA* *anu-ji* *gida-ji*
old.men hunt+IM.P-3PL FIL seal+ACC FIL-INS spear-INS
おじいさんたちは獲っている、あれ、アザラシを、あれで、槍で。（風間 2010: 69–70）

（51a）（52a）では、名詞語幹 *səduxi*「ベリー」、*pəətə*「アザラシ」の末尾に（主格では現れない）隠れた *n* があると見て、単純に *-bA* をその後ろに付ける *səduxim-bə*、*pəətəm-bə* となっている。（51b）*səduxxee* と（52b）*pəəttəə* では、子音の代償反復と母音の長音化をともなう融合が起こって、表層で境界がわからなくなっている。結果として（51a） *səduximbə* と（51b） *səduxxee*、（52a） *pəətəmbə* と（52b） *pəəttəə* はそれぞれ異なるように見えるが、意味・用法の区別はない。そのため、これらは形式の「揺れ」であると考えられる。

今日の北方言話者の何人かは、（51a）や（52a）のような接着形を、語幹に*-*mbA* という語尾が付いていると考えているようである。それに対して（51b）や（52b）のような融合形は説明が難しいため、とくにウイルタ語の学習では融合形を避けて接着形のほうを教える傾向がある。このように異分析と簡略化の傾向が重なって、会話のなかでも接着形が多用されるように

なっている。

6　まとめ

以上、ウイルタ語北方言の音韻論的・形態論的特徴を見てきた。ウイルタ語北方言の音韻論や形態論の基本は池上（1997a）らによる南方言と共通だが、いくつか異なる特徴も認められる。たとえば、母音音素 /ɵ/ の現れについては注意を払う必要がある。本稿では、2.2 や 3.2 で /ɵ/ が語根の内部にしか現れないという制約を規定したが、将来的には /ɵ/ を音素として立てない記述ができるようになっても不思議はない。また、3.4 でみた母音間の唇音・軟口蓋音の順序が南方言と北方言で逆になること、3.5 でみた母音間の単一の /k/ の出現制約の違いは接触言語との関係を考慮して今後精査していく必要がある。4.1 でみたアクセントの特徴にはロシア語の影響が色濃くみられる。5.3 でみた語形成における接着と融合の揺れには文法の簡略化傾向がうかがわれる。

もっとも、日本で記述されてきた南方言の特徴は主として 20 世紀前半のものであるのに対し、本稿が紹介した北方言の特徴は 1990 年代～ 2010 年代のものであり、両者を対比させるには時代幅が大きすぎる。したがって、本稿で見てきた特徴を単に方言差（地域差）として扱うには問題がある。サハリンのウイルタ語が経験してきた隣接言語との接触や、ロシア語への言語交替にともなうウイルタ語の衰退（話者の減少）を背景とした言語変化の一貫として、上記の特徴が生じてきたと考えたい。

謝辞

本稿は、科学研究費補助金基盤研究（B）（代表：津曲敏郎、18320061、2006-2009 年度）、同（代表：津曲敏郎、22320075、2010-2014 年度）、科学研究費補助金特別研究員奨励費（20・2110、2009-2010 年度）、独立行政法人日本学術振興会優秀若手研究者海外派遣事業（2010 年度）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所特別経費「急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築」による研究未開発言語調査派遣（2011 年度）、岡田宏明基金（2012 年度）の助成を受けて行った調査・研究成果の一部であり、山田（2013）第４章の内容の一部を加筆・修正したものである。ウイルタ語北方言の現地調査で全面的にご協力・ご支援くださる E. A. ビビコワ氏、F. Ja. フェジャエワ氏、サハリン州郷土博物館の皆様、そして日頃より筆者の研究をご指導くださる津曲敏郎先生に感謝申しあげる。

略号一覧

- – 形態素境界（融合しない）
= – 倚辞境界（融合しない）
+ – 融合
1 – 一人称
2 – 二人称
3 – 三人称
ABL – 奪格
ACC – 対格
AL – 譲渡可能
CAUS – 使役
C – 副動詞
COP – コピュラ動詞語幹
DAT – 与格
DFUT – 遠い未来
DIR – 方向格
DIT – 方向・目的「～しに行く」
EMPH – 強調
EVD – 証拠性（直接体験）

EXC – 感嘆
F – 定動詞
FIL – フィラー（言いよどみ）
FUT – 未来
HBT – 習慣
IM – 不完了
IMP – 命令
INCH – 開始
INFER – 推定
INS – 道具格
INTJ – 間投詞
IPSN – 非人称
ITR – 反復
LNG – 様式「～語で、～風に」
NEG – 否定動詞語幹
NFUT – 近い未来
NIM – 否定にともなう不完了形動詞
NOM – 主格
P – 形動詞
PL – 複数
PRF – 完了
PRG – 進行
PRL – 沿格
PRS – 現在
PURP – 目的
REF – 再帰所有
SG – 単数
VSF – 動詞語幹形成接尾辞
WHQ – 疑問詞疑問
YNQ – Yes-No 疑問

Ain. – アイヌ語
Jap. – 日本語
Rus. – ロシア語
Uil. – ウイルタ語

参考文献

池上二良（1955）「トゥングース語」市河三喜・服部四郎（編）『世界言語概説下巻』441–488. 東京: 研究社.

池上二良（1971）「ツングース語学入門」『學鐙』68（7）: 28–30［池上（2004: 67–105）に再録］.

池上二良（1989）「ツングース諸語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典』第 2 巻: 1058–1083. 東京: 三省堂.

池上二良（1990）「日本語・北の言語間の単語借用」『北海道方言研究会会報』30: 2–11，北海道方言研究会［池上（2004: 272–285）に再録］.

池上二良（1993）「ウイルタ語テキスト」村崎恭子（編）『サハリンの少数民族: サハリンにおける少数民族の言語に関する調査研究 : サハリンアイヌ語、ウイルタ語、ニブフ語』文部省科学研究費補助金（国際学術研究）研究成果報告書（1990–1992）, 73–103. 札幌.［池上（2002: 107-132）に再録］.

池上二良（1994a）「ウイルタ語の南方言と北方言の相違点」『北海道立北方民族博物館研究紀要』3: 9–38［池上（2001a: 247–283）に再録］.

池上二良（1994b）「樺太のウイルタ語の感嘆・疑問その他の語尾について」『北海道方言研究会 20 周年記念論文集 : ことばの世界』158–167. 札幌: 北海道方言研究会［池上（2001a: 94–109）に再録］.

池上二良（1997a）『ウイルタ語辞典』札幌: 北海道大学図書刊行会.

池上二良（1997b）「ウイルタ語研究及びウイルタ語の現状」『第 12 回特別展　樺太 1905–45 : 日本領時代の少数民族』19–24. 網走: 北海道立北方民族博物館［池上（2001a: 284–293）

に再録].
池上二良（2001a）『ツングース語研究』東京: 汲古書院.
池上二良（2001b）「ウイルタ語動詞活用大要」津曲敏郎（編）『環北太平洋の言語』7（文部省特定領域研究 A：環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A2-002）: 157–166. 吹田: 大阪学院大学情報学部.
池上二良（2002）『増訂ウイルタ口頭文芸原文集（ツングース言語文化論集 16)』（文部省特定領域研究（A）環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A2-013）. 吹田: 大阪学院大学情報学部.
池上二良（2004）『北方言語叢考』札幌: 北海道大学図書刊行会.
風間伸次郎（1992）「接尾型言語の動詞複合体について：日本語を中心として」宮岡伯人（編）『北の言語：類型と歴史』 241–260. 東京: 三省堂.
風間伸次郎（2011）「ウイルタ語調査報告」『北方人文研究』4: 51–74.
金子　亨（1998）「動詞複合体の構成について」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』1: 1–29.
津曲敏郎（1983）「ウイルタ語のアクセント」『アジア・アフリカ言語文化研究』12: 75–84.
津曲敏郎（1988）「ウイルタ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典』第 1 巻: 744–746. 東京: 三省堂.
澗潟久治（編）（1981）『ウイルタ語辞典』網走: 網走市北方民俗文化保存協会.
森貝聡恵（2016）「ウイルタ語北方言テキスト：『冬、父が私を連れ戻した』」『北方人文研究』9: 143–163.
山田祥子・荒山千恵（2010）「ウイルタの歌謡：言語と音楽の記録 4 例」『北海道民族学』6: 62–74.
山田祥子・笹倉いる美（2010）「北海道立北方民族博物館所蔵のウイルタ資料 I：対応する北方言の語彙を中心に（1)」『北海道立北方民族博物館紀要』19: 89–109.
山田祥子・笹倉いる美（2011）「北海道立北方民族博物館所蔵のウイルタ資料 I：対応する北方言の語彙を中心に（2)」『北海道立北方民族博物館紀要』20: 97–112.
山田祥子・笹倉いる美（2013）「北海道立北方民族博物館所蔵のウイルタ資料 I：対応する北方言の語彙を中心に（3)」『北海道立北方民族博物館紀要』22: 39–58.
山田祥子（2008）「ウイルタ語口頭文芸の伝聞形式：サハリンにおける言語接触の可能性」『北海道民族学』4: 63–71.
山田祥子（2009）「ウイルタ語北方言調査の課題と展望」『サハリンの言語世界：北大文学研究科公開シンポジウム報告書』11–26. 札幌: 北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター.
山田祥子（2010）「ウイルタ語北方言にみられる動詞語尾-li について」呉人惠（編）『環北太平洋の言語』15: 85–100. 富山: 富山大学人文学部.
山田祥子（2011a）「ウイルタの振楽器「ヨードプ」：復元工程についてのウイルタ語北方言テキストを中心に」『北方人文研究』4: 25–49［テキストの部分は加筆・修正して山田（2013: 173–186）に再録].
山田祥子（2011b）「ウイルタ語北方言テキスト：思い出話 2 編」『北海道民族学』7: 48–59［テキストの部分は加筆・修正して山田（2013: 130–138）に再録].
山田祥子（2011c）「ウイルタ語北方言テキスト：スルクタの作り方」『北方言語研究』1: 217–228.

［テキストの部分は加筆・修正して山田（2013: 183–190）に再録］.
山田祥子（2012）「ウイルタ語北方言テキスト：ありがとう、池上先生」『北方人文研究』5: 159–172.［テキストの部分は加筆・修正して山田（2013: 161–173）に再録］.
山田祥子（2013）「ウイルタ語北方言の文法と言語接触に関する研究」博士論文, 北海道大学.
山田祥子（2014）「ウイルタ語北方言テキスト：アザラシ肉に関する体験談」『北海道民族学』10: 104–113［山田（2013: 145-161）に収録したテキスト「回想録（4）：アザラシ肉とニヴフと日本人」の後半部分に解説を加えて報告］.
山田祥子 （2015a）「ウイルタ語北方言テキスト：人喰いお化けの話」『北方言語研究』5: 261–280.
山田祥子（2015b）「ウイルタ語調査報告：北部方言の文例（1）」『北海道立北方民族博物館研究紀要』24: 39–58.
山田祥子（2016a）「ギシクタウダ（マリーヤ・ミヘエワ）の生涯：ウイルタ語北方言テキスト」『北方言語研究』6: 179–201.
山田祥子（2016b）「ウイルタ語調査報告：北部方言の文例（2）」『北海道立北方民族博物館研究紀要』25: 45–66.
Ikegami, J., E. A. Bibikova, L. R. Kitazima, S. Minato, T. P. Roon, I. Ja. Fedjaeva (2008) *Uil-tadairisu: Govorim po-uil'tinski*. Juzhno-Sakhalinsk: Sakhalinskoe Knizhnoe Izdatel'stvo.
Ikegami, Jiro (1956) The substantive inflection of Orok.『言語研究』30: 77–96.［池上（2001a: 3–23）に再録］.
Ikegami, Jiro (1959) The verb inflection of Orok.『国語研究』9: 34–73.［池上（2001a: 24–66）に収録］.
Ikegami, Jiro (1973) Orok verb-stem-formative suffixes.『北方文化研究』7: 1–17.［池上（2001a: 66–72）に再録］.
Ikegami, Jiro (1974) Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen. *Sprache, Geschichte und Kultur der Altaischen Voelker, Protokollband der XII. Tagung der Permanent International Altaistic Conference 1969 in Berlin* : 271–272. Berlin: Akademie-Verlag［池上（2001a: 395–396）に再録］.
Ikegami, Jiro (1993) A brief history of the study of the Uilta language. K. Murasaki (ed.) *Ethnic Minorities in Sakhalin*, 65–72. Yokohama: Yokohama National University, Faculty of Education［池上（2001a: 294–308）に補遺付き再録］.
Ikegami, Jiro (1994) Proekt pis'mennosti ujl'tinskogo jazyka. *Acta Slavica Iaponica*, Tomus XII: 253–258.［池上（2001a: 145–153）に再録］.
Ikegami, Jiro (2001) The verb inflection of Orok: Addenda.『ツングース語研究』73–93. 東京: 汲古書院.
Ozolinja, L. V. (2001) *Oroksko-russkii slovar': okolo 12000 slov*. Novosibirsk: Izdatel'stvo SO RAN.
Ozolinja, L. V., I. Ja. Fedjaeva (2003) *Oroksko-russkii i russko-orokskii slovar'*. Juzhno-Sakhalinsk: Sakhalinskoe Knizhnoe Izdatel'stvo.
Tsumagari, Toshiro (1985) Grammatical outline of Uilta.『アジア・アフリカ文法研究』14: 1–15.

Tsumagari, Toshiro (2009) Grammatical outline of Uilta (revised). *Journal of the Graduate School of Letters* 4: 1–21. Graduate School of Letters, Hokkaido University.

Some phonological/morphological features from the Northern dialect of Uilta: Especially on differences from the Southern dialect

Yoshiko YAMADA
(Hokkaido Museum of Northern Peoples)

Uilta (formerly called Orok), one of the Tungusic languages, is divided into two dialects: the southern dialect (abbreviated to SD), which is spoken mainly in the district of Poronaisk (formerly called *Shisuka*) and the northern dialect (abbreviated to ND), which is spoken mainly in Val, a village in the northern part of Sakhalin.

The study of Uilta in Japan has almost depended on speakers of SD, who lived in the southern part of Sakhalin under the Japanese domination during 1905-1945. The first Japanese linguist, who researched ND of Uilta, was Jiro Ikegami. He visited Sakhalin during 1990-2001, collected Uilta linguistic materials, reported texts of ND (Ikegami 1993), and made a comparative study of the two dialects (Ikegami 1994a). He also suggested establishing a writing system for Uilta based on SD, which reflects earlier phase of the language (Ikegami 1994). Taking over the Ikegami's study, some Japanese linguists have recently visited Sakhalin and published materials (lexical terms, sample sentences, and texts of monologue, dialogue and songs) of ND by his transcriptional framework.

This paper aims to review the phonological and morphological features in ND, based on the latest materials (1990–today), especially focusing on differences from SD as the followings:

- Vowel phoneme *ɵ* is restricted within the word roots in ND.
- Metathesis of a labial (*p, b, m*) and a velar (*k, g, ŋ*) in the intervocalic consonant sequence.
- Appearance of single *k* in the intervocalic positions receives restriction in SD, while we find several words with intervocalic single *k* in ND.
- ND speakers tend to pronounce with the stress on diphthongs, and when the *o* is placed in the syllable next to syllable with diphthong, then they pronounce *o* like [*a*].
- As for the morpho-phonological modification of substantives and verbs, ND speakers do not distinguish fused forms and simply agglutinated forms. The latter forms seem to have appeared as part of grammatical simplification.